# 十五　「白雲や　只今花に　尋ね会い」

## ―草庵で語られた「葉隠」にこめられた願い―

一七一六年（享保元）といえば、江戸では紀州（和歌山県）から徳川吉宗が、八代将軍についた年でした。その年の九月十日、佐賀の大小隈（大和町大小隈）の山本常朝の庵ではいつものように田代又左衛門陣基との静かな語り合いが行われていました。

「又左衛門殿、貴殿は、われらがこの草深いこもれ日のさす草庵で語り尽くした話を、書き物にまとめられているが、今日をその完成の日としたらいかがであろう。まだまだ話し残したこともあるが、日峯様（佐賀藩祖鍋島直茂）以来の心を伝えるには、これほどで充分であろう。あとは色々残された記録で補えばよかろう。」「さようでございますか、私も、主膳様（のちの佐賀藩五代藩主鍋島宗茂）が江戸へ上られるこの時こそ、そのふさわしい時節かと思っていました。」

常朝先生垂訓碑（佐賀市金立町）

「葉隠」は一七一〇年、出家隠せいしていた常朝のところに、※祐筆役をとかれて無役になった陣基が、常朝の人生哲学をしたって、学びに通いつめたことがはじまりでした。時に、常朝五十二歳、陣基三十三歳。俳句の名人でもある陣基は、その出会いのよろこびを「白雲や只今花に尋ね会い」とよみました。語り合いは金立黒土原（佐賀市金立町）ではじめられ、思いもかけず長く続きました。パチパチ燃える庵の火を見つ

めながら夜更けまで話が続くこともありました。「朝顔のかれづるもゆる庵かな」。そのころの常朝の句です。こののち、常朝は事情で大小隈に草庵を移しますが、そこでもさらに三年語り合いがつづけられました。都合七年続いたわけです。では、その話し手の山本常朝とはどのような人だったのでしょうか。

常朝は一六五九年、佐賀城下の片田江横小路（現在の佐賀市水ケ江二丁目　中の橋小路）で生まれました。父は佐賀藩士山本神右衛門重澄。母は前田氏の娘でした。九歳の時から二代藩主鍋島光茂のそば近くに仕え、和歌関係の書物の書き写しなどの仕事に励みました。その後、一時、側近をはなれることもありましたが、多くをそば近くにあって、最後には光茂の和歌の仕事のため佐賀藩の京都事務所の職員である京都役をつとめました。一七〇〇年（元禄十三）、常朝四十二歳のとき光茂が没すると、※殉死の志がありましたが、藩法や幕法で禁ぜられていましたので、頭をまるめて出家し、金立黒土原へ隠せいすることにしたのでした。そして隠せいすること十年、すっかり山の暮らしに慣れたころ、陣基が訪ねてきたのです。「浮世から何里あろうか山桜」、出会いのときの常朝の句です。

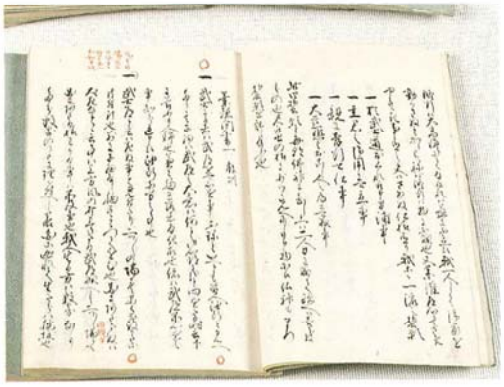
常朝と陣基の草庵での語り合い

二人の間の話から生まれた「葉隠」には、どのようなことが書かれているのでしょうか。陣基は「葉隠」

を十一巻にまとめました。一巻、二巻が常朝の人生哲学、三巻が藩祖鍋島直茂（日峯）の言行、四巻は初代藩主勝茂とその子忠直の言行、五巻～九巻は勝茂に続く佐賀藩の藩主や藩士の言行、十巻は他国の侍の言行、十一巻は補足です。ですから一巻と二巻と、そして、常朝が尊敬してやまなかった三巻四巻の直茂・勝茂の言行にその伝えたかった考えがあると見られます。常朝は何より「国学」、つまり佐賀藩創業の歴史と伝統に学ぶことが必要であると強調します。常朝自身が直茂・勝茂や佐賀の先人たちの一つ一つの事績をよく学んで大切にしていました。それは一枚一枚の葉っぱが、地面に落ちて次第に腐養土となっていくように、一つ一つの歴史が常朝の中で養分となり新しい生き方を示す人生哲学を生み出していきました。では、その常朝の心のなかで育まれた人生哲学とはどのようなものなのでしょうか。

「葉隠」研究の第一人者であった栗原荒野氏（一八八六～一九七六）は「葉隠」のエキスを簡単に三つにまとめました。「真剣に」「仲よく」「頑張れ」です。さらに子どもたちのために「うそいわぬ」「よくばらぬ」「へこたれぬ」と言いかえています。とても、当たり前で平凡なところに「葉隠」の本質があるととらえました。このなかでも、「仲よく」は、ほかの武士道の本にはあまり見られない特色です。巻頭に書かれた四つの大きなポイントである四誓願の一つにも、常朝は「大慈悲をおこして人のためになるように」と特に強調しました。これは「葉隠」全編の底流に流れている大きな特長の一つです。「葉隠」にはまた、いろいろな逸話に満ちあふれた当時の人々の人間模様がおどっています。作家の隆慶一郎氏は「何より人間が素晴らし

「葉隠」の写本（佐賀県立博物館蔵）



い。野放図で、そのくせ頑なで、一瞬先に何をしでかすか全く分からない、そうした人間像がひどく魅力的だった。…『葉隠』は『レ・ミゼラブル』や『巌窟王（モンテ・クリスト伯）』のように、或は又『デビッド・カッパーフィールド』のように、冒険と波瀾に満ち満ちた、痛快この上ない読物として、僕を楽しませてくれることになった。」（「死ぬことと見つけたり」）と読後の感想を述べています。ですから「葉隠」は人々に生き方のヒントを与える人生哲学もあれば、読物としての面白さもあるわけです。見方によっては、デパートに並べられたいろいろにぎやかな品物のようなもので、今日の生活にすぐに役立つ食料のようなものもあれば、長い間にゆっくりと役に立っていく家具のようなものもあり、それぞれに持ち味があるわけです。読み手によって色々な受け取り方ができる本と言えるでしょう。

常朝・陣基の語り合いのあった宗寿庵あと

「葉隠」は鍋島論語とも言われますが、この呼び名から思い起こされるのは「『論語』を読む人のために」として郷土の思想家下村湖人がいった言葉です。湖人は、論語を真理の果実にたとえ「われわれは、その皮におどろいて果肉をすててはならないし、さればといって、皮ごとうのみにしてもならない。皮をはいで果肉をたべる、これが要するに『論語』の正しい読み方なのである」といっています。これはまた鍋島論語とよばれた「葉隠」の読み方ともいえるでしょう。